

月刊

地域保健

11
2008



●FACE 2008

筑波大学人間総合科学研究科看護科学専攻教授
坂田由美子さん

●特集

発達障害
up to date

FACE
2008

筑波大学
人間総合科学研究科
看護科学専攻教授

坂田由美子さん

学校・地域の連携で継ぎ目のない生活習慣病予防を

若者のセルフエスティームを向上させる地域の受け皿づくり



わが国だけでなく、世界規模でさまざまな問題が噴出していきます。国が進むべき方向もよく分からないままに、経済・雇用の不安が拡大しています。社会のひずみは、これから社会に出ようとするとする敏感な若者の心に悪影響を及ぼします。若者の不登校、いじめ、自殺、妊娠・中絶などの問題は決して個人だけの問題ではなく、地域社会と学校が協働して解決にあたるべきテーマであるといえます。また、健康な生活習慣を形成すべきこの時期が、適切な介入のないままに将来の生活習慣病の土壌となっている現実も憂慮すべき事態です。中高生の健康問題について、セルフエスティームの概念を使い研究を続けている筑波大学の坂田由美子先生に、今の若者の健康課題とその解決法についてお話を伺いました。

自分を認められない 若者たち

—「健康尺度」と、それを使った中高生の健康の実態についてお伺いします。

坂田 「健康尺度」は、養護教諭の先生が授業間の短い休み時間の中で、子どもたちの状況を把握できるようにつくったもので、先行研究や一般調査のレ

ビューの中から、中高生にふさわしい項目をピックアップしました。

頭痛、腹痛などの身体的・機能的・器質的な症状のチェックをはじめ、イライラ、不安、不眠などの精神的チェック、友だちとうまくいかないなどの人間関係のチェックもあります。チェック項目の中には、「横になって休みたい」という項目もあり、8割くらいの生徒がこの項目にチェックを入

れていました。10年くらい前の話ですが、これは今でも変わりません。体力旺盛であるはずの若者が朝から「横になって休みたい」と感じているというのですから、ショッキングなデータです。もちろん、器質的に異常があるというのではなく、ストレスが強かったり、前向きに生きる姿勢が弱いのが原因と思われました。

調査を通じて、彼ら彼女らは今までの学校生活の中で、楽しいとか満足するという部分が少ないのではないかと感じました。「頑張れ、頑張れ」と言われてずっと頑張ってきたけれど、それで本当によかったという、自分をしっかり受けとめられる状況がないのではないか。そこで、「セルフエスティーム」という視点から、中高生のこの問題をみることにしています。

—セルフエスティームについて解説を

p8

厚生労働省発達障害対策専門官・日詰正文さんに聞く
～「発達障害のある人の魅力を知ってほしいと思います」～

取材・文 編集部

p14

発達障害の最新知見

筑波大学人間総合科学研究科 大戸達之

筑波大学人間総合科学研究科 宮本信也

p22

発達障害と子ども虐待

淑徳大学総合福祉学部 松田博雄

p34

保育モデル“あおぞら”による早期発見・支援の成功
～愛知県「豊田市こども発達センター」の取り組み～

取材・文 編集部

p43

「ペアレントトレーニング」による親支援

～山梨県峡東保健福祉事務所(峡東保健所)の取り組み～

取材・文 編集部

p50

広汎性発達障害児の療育教室「ステップアップ教室」
～長野県佐久保健所の取り組み～

取材・文 編集部

p58

とぎれない子ども支援

面としての総合支援を目指して

～三重県・亀山市子ども総合支援室の取り組み～

亀山市保健福祉部 子ども総合支援室長 志村浩二(臨床心理士)

p68

身近なところ、実行可能なところから

“ひと”との連携、信頼関係が進む“11の事業”

～京都府舞鶴市発達障害調査事業による取り組み～

舞鶴市保健福祉部 児童・障害福祉課 瀬野勝久

p77

地域療育センターでの医療と療育、そして就学へ
～横浜市の取り組み～

文・写真 西内義雄(フリーライター)



特集

発達障害 up to date

2005年には発達障害者支援法が施行され、全国の都道府県・指定都市の発達障害者支援センターは開設予定の64カ所のうち62カ所まで設置を終えた(08年10月末現在)。この夏には「発達障害者支援の推進に係る検討会」の報告書がまとめられ、支援の方向が整理された。発達障害者・児に関する施策は急ピッチで展開されている。多くの自治体は手探りで対応しているのが現状だが、支援手法の開発、関係機関の連携、国民の啓発などを進める環境は整いつつある。

今月の特集は、厚生労働省・発達障害対策専門官へのインタビュー、発達障害に関する最新知見の紹介、先進的な取り組み事例を掲載し、発達障害に関する「今」を報告する。

青い海に憧れ

長野から沖縄へ

唯一無二、住民に頼られる
保健師を目指す

霜田さんは笑顔の素敵な好青年

看護師の世界に男性の進出が目立つようになってきた。では保健師はどうだろう？ 私の知る限り、まだまだ少ないと思われる。ただ、調べていくと沖縄県には比較的男性保健師が多いという。そこで誰か良い男性のひよこさんはいないかと探し回っていたところ、沖縄で最初に男性保健師となった方（88頁のコラムで紹介）と知り合い、ユニークな人材を紹介してもらうことができた。

今回のひよこさんが在籍しているのは那覇空港から車で約30分、那覇市の隣にある南風原（はえばる）町だ。沖縄には珍しく海に面していない町で、人口は約3万4000人。那覇市のベッドタウンとして、ここ20年ほど常に人口が増えている。

保健福祉課に行き本人を探す。取材ではこの瞬間が一番楽しみでもあり緊張する場面でもある。すでにメールや

電話のやり取りはしていますが、会うのは初めてなわけで、自分が思い描いていたイメージと大きく異なるか、予想通りなのか、今回はとくに男性ということで楽しみだった。

結果は？
思った通りだった。名前は霜田高士さん。沖縄らしくかりゆし姿で現れた。人懐っこい笑顔も印象的で、さまざま人に接する保健師として第一印象を得をしている。まずそう感じたのであった。

霜田さんは長野県佐久市出身の27歳。高校まで地元佐久市の普通科に在籍していた。当時の霜田さんは日本史に興味があったが、父親が内科医をしていた影響もあり医療の道も身近なものとして感じていた。

「最終的に日本史では食べていくのは難しい。かといって医師になるのは大変なストレスがたまりそう。できれば

同じ医療の世界でも看護師がいいなと思ったわけです」

そこで進学先に選んだのが沖縄県立看護大学だった。なぜイキナリ沖縄なのか？ 長野にも学校があるし、東京に出る選択肢もあつたはずだ。

「高校の修学旅行で沖縄に行ったんですよ。長野県には海がないですから、本物の青い海を見たときの衝撃が強かったです。それに僕は子どものころ、父が仕事のストレスからうつ病になり入院していたことがあります（現在は元気）、家族で旅行に出たこともなかった。そんな背景から沖縄に憧れたのです」

全国どこに行っても看護師の免許は取れる。ならば、自分の人生なんだから好きな場所に行きたい！ 若さと情熱が見知らぬ土地を目指し、希望通り、沖縄県立看護大学看護学部看護学科に入学した。